

入選

大槻 玲奈 (おおつき れな) 檜原中 2年生

作品名：命という大宇宙

図 書：夏の庭

「僕は誰かが死んだらどんな気持ちになるかなんてこと、ぜんぜん知らないのだ。」

木山は、堂々と正直にそう思っています。私はホッとしました。私も「知らない」と正直に思ってたのだと。私は身近な人が亡くなった経験がありません。友達がおばあさんを亡くして悲しんでいたとき、私はその友達の気持ちを知ることができませんでした。それから私は、人の命の重みを知らないのだとずっと後ろめたい気持ちでいました。でも、木山のように、「知らない」ことを受け入れると、それなら知る努力をすればいい、人の命について考えていきたいと前向きに思えるようになったのです。

この本の木山、河辺、山下の三人組は「死」というものがどのようなものなのか知りたくて、近所の死にそうだと噂されているおじいさんを見張ります。軽率だとは思いますが、彼らはひたすら自分の気持ちに正直なのだと思います。おじいさんは元気がなく何か文句あるか的な目つきをしながら一人のろのろ散歩します。私はよくいるおじいさんだなあと思いました。スーパーのレジでおぼつかない手でゆっくり小銭を出すおじいさん、公園のベンチでぼんやり座っているおじいさんなど元気がないお年寄りを見かける度、私にはとてもか弱い存在に思えました。

物語のおじいさんは、三人組とかかわっていくうちに、どんどん元気になっていきます。やがて、三人組とおじいさんは、すっかり仲間になり、彼らはおじいさんから様々なことを学びます。おじいさんは、彼らにとってかけがえない存在になったのです。私も自分の中でおじいさんの存在が尊くなっていくのを感じました。おじいさんが自分の過去を話す場面では、戦争中人を殺したことやそのことで結婚した女性の元へ戻れなかったことを告白します。私は目をつぶって戦争時代を想像しました。昔、本で見た戦争の写真がリアルに浮かんできて胸が締めつけられました。おじいさんが北海道で暮らした子供時代を花屋のおばあさんと語り合う場面では、いつの間にか私もおじいさんの優しい思い出の中に浸っ

ていました。私はもうこのおじいさんが、よくいるおじいさんだと思わなくなりました。そして、よくいるおじいさんも「よくいる」などと思わなくなりました、一人一人誰もが様々なことを感じ考え経験し、色とりどりの思いや記憶が渦巻く果てしない宇宙のような存在に思えてきたのです。か弱く見えるお年寄りも、大きな大人も、小さな子供も、みんなそれぞれの美しさを持つ、巨大な宇宙のような存在、命なのではないかと思うのです。

おじいさんが亡くなって、三人組は人が死ぬ悲しみを思い知りました。私も自分の宇宙の一部が消えたような気がしました。それはおじいさんと私の宇宙が重なっていた部分ではないかと思いました。でも、物語の終わりに、私はおじいさんの宇宙は消えたのではないと思いました。それは、三人組それぞれの宇宙におじいさんはまだいて、彼らを励まし続けていたからです。最後に山下が言います。

「オレたち、あの世に知り合いがいるんだ。それってすごい心強くないか!」

私は、おじいさんの宇宙は消えたのではなく、あの世に移動したのだと思いました。そして彼らの宇宙とずっとつながっているのだと思います。「人の命」とは、どれも果てしない大宇宙のようなもので、宇宙どうしは重なり合い、つながり合っているのではないかと、この本を読み終えた今、私は思っています。